催眠に対する態度を測定する尺度の信頼性
―再検査信頼性と内的整合性の検討―

中谷智美・福井義一

要約

催眠は心身のケアに有効な技法として知られている。催眠に対する評価的な態度（催眠態度）は，催眠の効果を検討する上で重要な概念であると考えられる。というのも，催眠態度は，催眠の効果を強く予測する要因の一つである催眠感受性と一貫して正の関連を示すからである。しかし，わが国において，催眠態度を測定する尺度は催眠態度尺度しか存在しない。本尺度は，改訂を重ねるごとに項目数が異なる（6項目版：清水・小玉，2001，12項目版：清水，2009，5項目版：清水，2022; Shimizu, 2014）が，総じて内的整合性は高い。しかし，いずれの版においても，再検査信頼性は未検討であった。そこで本研究では，本尺度の各版における再検査信頼性を検討するとともに，内的整合性を再検討した。一般成人69名が約1週間間隔で2回のオンライン調査に参加した。分析の結果，いずれの版も高い再検査信頼性（rs＞.81, ps＜.001）と内的整合性（αs＞.81）を有することが分かった。中でも，1因子性が確認され，二度の測定間で変動が最も少ないことから，5項目版（清水，2022; Shimizu, 2014）の使用が推奨されると結論づけられた。

キーワード：催眠態度，再検査信頼性，内的整合性，催眠感受性

問題

催眠は，心的外傷後ストレス障害（例，Rotaru & Rusu, 2016）やうつ病（例，Fuhr et al., 2021）などの精神症状の緩和だけでなく，過敏性腸症候群（例，Schaefert et al., 2014）や痛み（例，Gregoire et al, 2022; Milling et al., 2021; Moreno Hernandez et al., 2022）などの身体症状の緩和にも役立つことが知られており，心身のケアに有効な技法であると言える。

催眠の効果の最大の予測因子に，催眠感受性が挙げられる。催眠感受性とは，催眠暗示に対する反応性のことであり，催眠感受性が高いほど催眠の効果も高いことが分かっている（例，Enea et al., 2014; Keuroghlian et al., 2009; Montgomery et al., 2011）。そのため，臨床場面で催眠を用いた介入が候補となる際に，催眠感受性を事前に把握できれば，その効果の予測に資すると考えられる。しかしな

がら，標準化された催眠感受性テスト（例，Elkins et al., 2015; Shor & Orne, 1962; Weitzenhoffer & Hilgard, 1962）は，いずれも実施に1時間以上を要するため，臨床場面で実際に催眠感受性を測定することは現実的ではない。催眠感受性テストの代替手段としてCreative Imagination Scale（Wilson & Barber, 1978; 日本語版：高石・中村，2006）が開発されたが，実際には催眠感受性を測定しておらず（McConkey, Sheehan, & White, 1979），その上実施に20分程度を要するため，実用的とは言えない。また，多くの人々が催眠について否定的なイメージを有することが分かっている（例，福井他，2022a–c; 福井・大浦，2016; Nakatani, Fukui, Imaida et al., 2022; 中谷他，2022a–g, 2023; 大浦・松尾・福井，2018）ため，催眠を利用するかどうかを決めるためとはいえ，介入前に対象者を催眠状態に誘導することには相応のリスクが伴うと考えられる。そのため，催眠感受性以外に，容易に測定が可能であり，かつ催眠の介入効果を間接的に予測可能な要因を探索する必要がある。

本研究では，催眠に対する態度（以後，催眠態度）に着目した。催眠態度は，上述した催眠感受性と一貫して中程度の正の相関を示す（例，Green & Lynn, 2010; Melei & Hilgard, 1964）ことに加えて，催眠下での被催眠者の状態についての信念（以降，催眠状態期待）が催眠感受性に及ぼす影響を媒介する（Shimizu, 2014）ことが知られている。いずれの場合も，催眠態度は催眠感受性を直接的に予測する。また，催眠態度は自記式の心理尺度で測定できる構成概念であるため，測定も容易である。そのため，催眠感受性の代わりに催眠態度を把握することで，効果を間接的にある程度予測できると考えられる。実際に催眠状態に誘導する必要もないので，催眠に対して否定的なイメージを有する対象者に実施しても，脅威を与えにくいという利点もある。加えて，催眠に対する好悪といった感情的評価を把握できるため，事前の心理教育の必要性を判断するのにも役立つ。

海外では，これまでに催眠態度を測定する複数の尺度が開発されてきた（例，Capafons et al., 2004; Capafons et al., 2008; McConkey, 1986; Spanos et al., 1987）のに対して，わが国には催眠態度尺度（清水，2009，2022; Shimizu, 2014; 清水・小玉，2001）しかない。清水（2022）は，催眠観と催眠態度の概念的位置づけや，両者の催眠感受性に対する影響力の識別が不明確であることを指摘し，両者を明確に識別して測定するために，催眠状態期待尺度（清水，2009; 清水・小玉，2001）と催眠態度尺度（清水，2009，2022; Shimizu, 2014; 清水・小玉，2001）を開発した。前者は催眠についての知識・信念のうち，催眠下で被催眠者が陥る状態についての知識や信念を，後者は催眠に対する興味や関心といった感情的評価をそれぞれ測定可能である。

これまで，わが国において，催眠状態期待と催眠態度の関連や，これらと催眠

感受性との関連を検討した研究（福井, 2012a, b, 2013-2015; 福井・中谷，2021; 福井・小原，2013; Fukui et al., 2018; 今井田他，2019，2020; 中谷・福井他，2021a-d; Nakatani et al., 2021a, b; 中谷・大浦他，2019a-d; 清水，2009，2019，2022）や，心理教育による催眠態度の変容を検討した研究（福井・中谷・大浦，2020a, b; 中谷・福井他，2021e; Nakatani, Fukui, Oura, & Imaida, 2022, 2023），催眠観と催眠態度の対応関係を検討した研究（福井他，2022a-c; 中谷他，2022a-g, 2023; Nakatani, Fukui, Imaida et al., 2022）で，本尺度が積極的に使用されてきた。

催眠態度尺度は，改訂を重ねるごとに項目構成が異なる（6項目版：清水・小玉，2001，12項目版：清水，2009，5項目版：Shimizu, 2014; 清水，2022）が，総じて内的整合性は高い（それぞれ，α=.78，α=.84，α=.81）ことから，高い信頼性を有する有用な尺度であると言える。しかしながら，いずれの版においても再検査信頼性は未検討であった。催眠態度の測定の精度を担保するには，本尺度の再検査信頼性の確認が喫緊の課題である。

そこで，本研究では，全12項目版の催眠態度尺度（清水，2009）を用いて，各版における再検査信頼性を検討するとともに，内的整合性についても再確認した。なお，近年では，研究デザインに性差の分析を含めることが重視されている（Editorial Board, 2022）。しかしながら，催眠研究において，催眠態度の性差について言及した先行研究は少ないため，本研究でも，性差を要因に含めて検討した。

方法

協力者

以下に述べる条件に合致した一般成人69名（男性43名，女性26名）のデータを分析対象とした。平均年齢は43.32歳（SD=9.23）であった。対象者の条件は，1）同時期に行われた催眠に関するいずれの調査にも参加していないこと，2）不良回答をスクリーニングするためのフィラー項目の指示に従ったこと，3）初回調査と再調査のどちらにも参加したことの3点であった。

尺度構成

催眠態度の測定に，催眠態度尺度（清水，2009）を用いて，3つの版の催眠態度得点を得た。各質問項目に対し，「1. 全く当てはまらない」～「4. よく当てはまる」の4件法で回答を求めた。得点が高いほど催眠に対して肯定的であることを示す。催眠態度尺度（清水，2009）の全12項目と，各版との対応関係をTable

Table 1　催眠態度尺度の質問項目

○	●	私は機会があれば催眠をかけられてみたい
○	●	私は自分が催眠にかかるかどうかを知りたい
		催眠がどういうものかを知りたい
○	●	自分が催眠をかけられるのは嫌だ*
		自分が暗示に反応するのは面白いと思う
		暗示に身をまかせてみてもよいと思う
○	●	私は自分が催眠にかかることを怖いと思わない
○	●	催眠にかかると面白いことが起こると思う
	●	私は自分が催眠にかかるということを人に知られてもかまわない
		私は催眠に関係したテレビや本をみるのが好きである
		催眠はつまらないものだと思う*
		私は自分に催眠をかけられることを不安に思う*

*：逆転項目
●：6 項目版の項目
○：5 項目版の項目

1 に示した。

手続き

初回調査と再調査のいずれについても，クラウドソーシング・サービス会社の Lancers を利用し，協力者を募集した。各調査とも報酬は50円であった。Lancers の依頼画面に報酬額とその支払い条件，オンライン調査用の URL を記載した。オンライン調査には，Qualtrics を使用した。いずれの調査においても，はじめに本研究への参加の同意を得た後，質問票への回答を求めた。再調査は，初回調査実施から 1 週間後に，初回調査と同様の手続きを経て協力者を募集し，同様の手続きで実施された。

倫理的配慮

本研究は，第二著者の所属先のヒトを対象とした研究審査の承認を得て実施された（承認番号21-10）。事前に報酬の支払い条件と本研究の趣旨，プライバシーの保護，データの保管方法などについて同意が得られた者だけが，調査に参加した。

分析ツール

HAD17_205（清水，2016）を使用した。

結果

因子構造

催眠態度尺度の一因子性を確認するために，各版の初回調査のデータを用いて主成分分析（主成分法・バリマックス回転）を行った。その結果，6項目版と5項目版は1因子であることが確認され，いずれの項目の因子負荷量も十分であった（≧.35）。それに対して，12項目版は固有値の減衰状況と最小平均偏相関からは2因子構造が妥当であると判断されたが，いずれの因子にも高い負荷量を示す項目が複数あり，単純構造が示されなかった。

Table 2　初回調査における催眠態度尺度の主成分分析（主成分法・バリマックス回転）結果

			12項目版			6項目版		5項目版	
項目番号			因子1	因子2	共通性	因子	共通性	因子	共通性
		11	−.86	−.02	.74	—	—	—	—
		3	.83	.10	.69	—	—	—	—
○	●	2	.81	.17	.68	.71	.50	.74	.55
		10	.72	.24	.57	—	—	—	—
○	●	8	.71	.41	.67	.78	.61	.82	.67
○	●	1	.69	.62	.86	.93	.86	.94	.88
○	●	7	−.02	.83	.69	.62	.39	.60	.36
		12	−.10	−.82	.68	—	—	—	—
○	●	4	−.48	−.72	.74	−.88	.77	−.87	.76
	●	9	.18	.69	.50	.63	.39	—	—
		6	.58	.64	.75	—	—	—	—
		5	.58	.64	.75	—	—	—	—

○：5項目版の項目
●：6項目版の項目

再検査信頼性と内的整合性

催眠態度尺度の各版の再検査信頼性を検討するために，2回の得点間の相関係数を算出した結果，いずれの版においても非常に強い有意な正の相関が得られた（rs＞.81, ps＜.001）。また，内的整合性を検討するために，各調査時におけるα係数を算出した結果，いずれの版・回においても.85以上の高い値が得られた。Table 3に，各版における催眠態度得点の平均値とα係数，再検査信頼性を示した。

Table 3　版と性別，測定時期ごとの催眠態度得点の記述統計量と α 係数，再検査信頼性

		男性（N=43）		女性（N=26）		全体（N=69）	
		pre	post	pre	post	pre	post
6 項目版	M	2.47	2.33	2.49	2.33	2.48	2.33
	SD	0.46	0.70	0.41	0.75	0.44	0.71
	α	.85	.90	.87	.91	.85	.91
	再検査信頼性	r=.81		r=.81		r=.81	
12項目版	M	2.41	2.37	2.41	2.38	2.41	2.38
	SD	0.61	0.60	0.67	0.69	0.63	0.63
	α	.92	.92	.93	.93	.92	.92
	再検査信頼性	r=.90		r=.90		r=.90	
5 項目版	M	2.43	2.34	2.38	2.35	2.41	2.34
	SD	0.68	0.71	0.77	0.78	0.71	0.73
	α	.84	.89	.88	.91	.86	.90
	再検査信頼性	r=.86		r=.83		r=.85	

注 1）pre：初回調査，post：再調査
注 2）再検査信頼性はすべて p<.001

催眠態度尺度の各版の得点の関連

また，催眠態度尺度の各版の得点間の関連を検討するため，測定時期ごとに相関分析を行った結果，すべて有意な強い正の相関を示した（r>.91）。Table 4 に，測定時期ごとの各版同士の相関係数を示した。

Table 4　測定時期ごとの各版同士の相関係数

	6 項目版	12項目版	5 項目版
6 項目版	—	.97***	.99***
12項目版	.92***	—	.98***
5 項目版	.91***	.96***	—

注 1）***：p<.001
注 2）左下：初回調査，右上：再調査

版の別による得点の違いと 2 回の調査による変動，性差

版の別による催眠態度得点の違いと 2 回の調査による変動，性差を検討するために，版の別×測定時期×性別の 3 要因分散分析を行った結果，測定時期の主効果（$F(1, 67)=3.84, p<.10, \eta_p^2=.054$）が有意傾向，版の別×測定時期の一次の交互作用（$F(2, 134)=5.49, p<.05, \eta_p^2=.076$）が有意であったのに対し，その他

の主効果と交互作用は有意ではなかった（版の別：$F(2, 134)=0.80, \eta_p^2=.012$，性別：$F(1, 67)=0.00, \eta_p^2=.000$，版の別×性別：$F(2, 134)=0.23, \eta_p^2=.003$，測定時期×性別：$F(1, 67)=0.02, \eta_p^2=.000$，版の別×測定時期×性別：$F(2, 134)=0.73, \eta_p^2=.011$，すべて *n.s.*）。

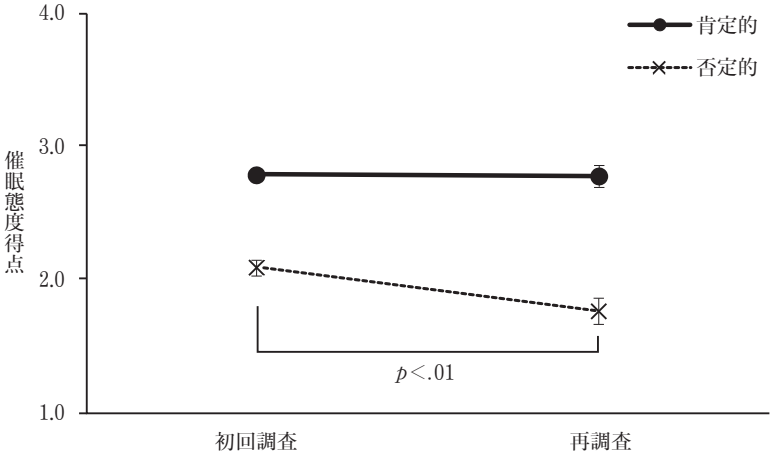
一次の交互作用が有意であったため，版の別について測定時期の単純主効果検定を行った結果，6項目版においてのみ測定時期の主効果が有意であり（$F(1, 204)=10.69, p<.01, \eta_p^2=.136$），その他の版では有意ではなかった（12項目版：$F(1, 204)=0.55, \eta_p^2=.008$，5項目版：$F(1, 204)=2.31, \eta_p^2=.033$，すべて *n.s.*）。このことから，6項目版においてのみ初回調査時の方が再調査時よりも得点が高いことが分かった。次に，測定時期について版の別の単純主効果検定を行った結果，初回調査において版の別の主効果が有意であった（$F(2, 272)=3.75, p<.05, \eta_p^2=.052$）のに対して，再調査では有意ではなかった（$F(2, 272)=1.57$, *n.s.*, $\eta_p^2=.023$）。多重比較の結果，初回調査時には6項目版の方が12項目版よりも得点が有意に高いことが分かった。

2回の調査による変動の精査

さらに，各版における催眠態度得点の2回の調査による変動を精査するため，催眠態度得点の変化量（再調査の値から初回調査の値を減算）を従属変数，各版における事前の値を統制変数，版の別と性別を独立変数とした共分散分析を実施した。その結果，すべての版で，版の別×事前の値の交互作用（6項目版（$F(2, 128)=47.22, p<.001, \eta_p^2=.425$），12項目版（$F(2, 128)=32.47, p<.001, \eta_p^2=.337$），5項目版（$F(2, 128)=40.04, p<.001, \eta_p^2=.385$））がそれぞれ有意となり，平行性の仮定が満たされなかったため，共分散分析を実施できなかった。このことは，事前の値によって変化の方向性が異なる可能性を示している。そこで，性別に加えて，事前の値の平均値を基準とした群分け（高・低）を独立変数に加えた上で，各版の変化量を従属変数とし，性別×事前の値の2要因分散分析を3回実施した。

6項目版の催眠態度得点の変化量を従属変数とした性別×事前の値の2要因分散分析の結果，事前の値の主効果が有意であった（$F(1, 65)=9.97, p<.01, \eta_p^2=.133$）のに対し，性別の主効果（$F(1, 65)=0.21$, *n.s.*, $\eta_p^2=.003$）と交互作用（$F(1, 65)=1.13$, *n.s.*, $\eta_p^2=.017$）は有意ではなかった。このことから，事前の催眠態度が否定的な群の方が肯定的な群よりも変化量が有意に大きいことが分かった。Figure 1に事前の値ごとの6項目版の催眠態度の変化を示した。

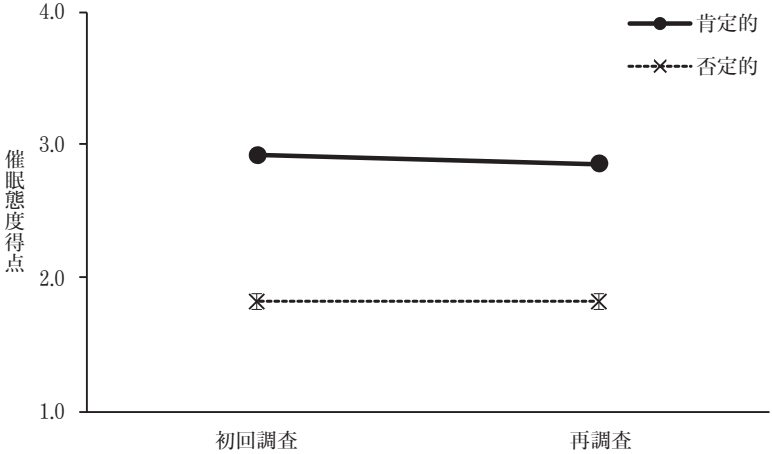
Figure 1　事前の値ごとの 6 項目版の催眠態度の変化



注）エラーバーは標準誤差

次に，12項目版の催眠態度得点の変化量を従属変数とした性別×事前の値の 2 要因分散分析の結果，事前の値の主効果（$F(1, 65)=0.81$, *n.s.*, $\eta_p^2=.012$）と性別の主効果（$F(1, 65)=0.00$, *n.s.*, $\eta_p^2=.000$），交互作用（$F(1, 65)=0.37$, *n.s.*, $\eta_p^2=.006$）のいずれも有意ではなかった。Figure 2 に事前の値ごとの12項目版の催眠態度の変化を示した。

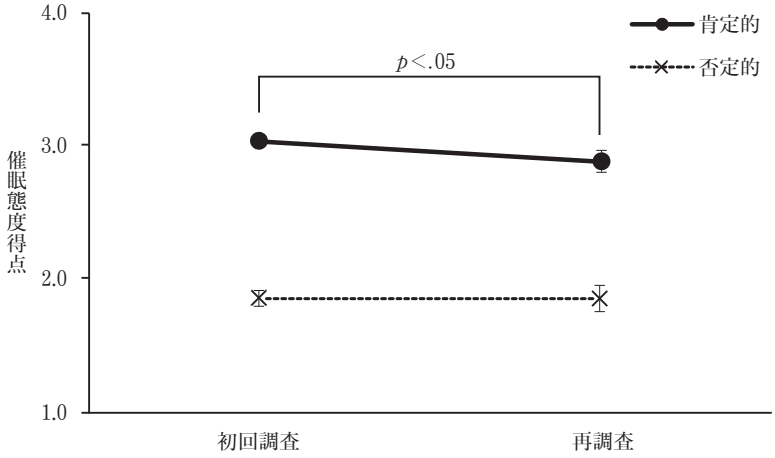
Figure 2　事前の値ごとの12項目版の催眠態度の変化



注）エラーバーは標準誤差

最後に，5項目版の変化量を従属変数とした性別×事前の値の2要因分散分析の結果，事前の値の主効果が有意であった（$F(1, 65)=4.45, p<.05, \eta_p^2=.064$）のに対し，性別の主効果（$F(1, 65)=0.28, n.s., \eta_p^2=.004$）と交互作用（$F(1, 65)=1.24, n.s., \eta_p^2=.019$）は有意ではなかった。このことから，事前の催眠態度が肯定的な群の方が否定的な群よりも変化量が有意に大きいことが分かった。Figure 3に事前の値ごとの5項目版の催眠態度の変化を示した。

Figure 3　事前の値ごとの5項目版の催眠態度の変化



注）エラーバーは標準誤差

考察

本研究の目的は，催眠態度尺度（清水，2009）を用いて，項目数が異なる3つの版の再検査信頼性を検討するとともに，内的整合性を再検討することであった。再検査信頼性とα係数の値はいずれの版・性別においても十分であった。しかしながら，主成分分析の結果，6項目版（清水・小玉，2001）と5項目版（清水，2022; Shimizu, 2014）では1因子性が確認されたのに対し，12項目版（清水，2009）では2因子に分かれ，単純構造が示されなかった。さらに，測定間における催眠態度得点の変化を検討した結果，12項目版（清水，2009）と5項目版（清水，2022; Shimizu, 2014）は測定間で催眠態度得点に変化がみられなかったのに対し，6項目版（清水・小玉，2001）は初回調査における催眠態度得点の方が再調査におけるそれよりも高かった。その上，6項目版（清水・小玉，2001）と5項目版（清水，2022; Shimizu, 2014）において，初回調査の催眠態度の得点の高低で，

再調査の得点の変動が異なっていた。これらのことから，再検査信頼性はいずれの版でも十分であるが，6項目版（清水・小玉，2001）は測定間の変動がやや大きく，12項目版（清水，2009）は因子構造に問題があることが分かった。それに対して，5項目版（清水，2022; Shimizu, 2014）は1因子構造であり，再検査信頼性も高く，測定間の変動も小さい。さらに，事前の催眠態度得点の高さによって測定間の変動が異なるものの，その効果量は非常に小さい（η_p^2=.064）。以上から，催眠態度の測定には5項目版（清水，2022; Shimizu, 2014）が最も適していると考えられる。5項目版と他の版の相関も.90を超えていることから，項目数が減少しても，測定の精度は十分に保たれていると言える。

本研究の限界と課題

本研究の限界として，催眠態度尺度の各版の得点を，12項目版（清水，2009）に対する回答を用いてそれぞれ算出したことが挙げられる。これにより，6項目版（清水・小玉，2001）と5項目版（清水，2022; Shimizu, 2014）の得点は，それに含まれない12項目版に含まれる他の項目内容やそれらに対する回答の影響を受けた可能性がある。そのため，各版における再検査信頼性の検討の精度をより高めるために，版別に協力者を集めて再検討する必要があるだろう。

附記

本稿は，日本ヒューマン・ケア心理学会第24回学術集会における研究発表（中谷・福井，2023）を論文化したものである。

引用文献

Capafons, A., Cabanas, S., Espejo, B., & Cardena, E. (2004). Confirmatory factor analysis of the Valencia Scale on Attitudes and Beliefs Toward Hypnosis: an international study. *International Journal of Clinical and Experimental Hypnosis, 52*, 413-433.

Capafons, A., Espejo, B., & Mendoza, M. E. (2008). Confirmatory factor analysis of the Valencia Scale on Attitudes and Beliefs toward Hypnosis, Therapist version. *International Journal of Clinical and Experimental Hypnosis, 56*, 281-294.

Editorial Board (2022). Nature journals raise the bar on sex and gender reporting in research. *Nature, 605*, 396.

Elkins, G. R., Barabasz, A. F., Council, J. R., & Spiegel, D. (2015). Advancing Research and Practice: The Revised APA Division 30 Definition of Hypnosis. *American Journal of Clinical Hypnosis, 57*, 378-385.

Enea, V., Dafinoiu, I., Opris, D., & David, D. (2014). Effects of hypnotic analgesia and virtual

reality on the reduction of experimental pain among high and low hypnotizables. *International Journal of Clinical and Experimental Hypnosis, 62*, 360-377.

Fuhr, K., Meisner, C., Broch, A., Cyrny, B., Hinkel, J., Jaberg, J. Petrasch, M., Schweizer, C., Stiegler, A., Zeep, C., & Batra, A.（2021）. Efficacy of hypnotherapy compared to cognitive behavioral therapy for mild to moderate depression—Results of a randomized controlled rater-blind clinical trial. *Journal of Affective Disorders, 286*, 166-173.

福井 義一（2012a）．催眠への態度や催眠状態への期待と共感性の関連について―アナログ研究―　日本催眠医学心理学会第58回大会発表論文集，36．およびプレゼンテーション資料.

福井 義一（2012b）．依存欲求と催眠に対するイメージが催眠への肯定的態度に及ぼす影響日本臨床催眠学会14回大会発表論文集，８.

福井 義一（2013）．催眠に対するイメージが催眠への肯定的態度に及ぼす影響２―批判的思考の調整効果―　日本臨床催眠学会第15回大会発表論文集，20.

福井 義一（2014）．催眠イメージが催眠への肯定的態度に及ぼす影響の調整要因―青年期アナログ研究―　日本催眠医学心理学会第60回大会および日本臨床催眠学会第16回大会合同大会発表論文集，36.

福井 義一（2015）．催眠態度と催眠イメージの組み合わせによるサブタイプの探索的検討日本催眠医学心理学会第61回大会発表論文集，32.

福井 義一・中谷 智美（2021）．催眠状態期待と催眠態度を用いたサブ・タイプの抽出とそのプロフィールの性差―クラスタ分析による予備的検討―　第64回日本心身医学会近畿地方会第51回近畿地区講習会プログラム・抄録集，32.

福井 義一・中谷 智美・今井田 貴裕・磯和 壮太朗・堀 孝司・大浦 真一（2022a）．わが国における催眠についての信念やイメージの探索的研究 その２―催眠状態期待のテキストマイニング分析から―　第65回日本心身医学会近畿地方会　一般演題　抄録集，10.

福井 義一・中谷 智美・今井田 貴裕・磯和 壮太朗・堀 孝司・大浦 真一（2022b）．催眠についてのイメージと催眠態度の対応関係の性差 その２―催眠状態期待の自由記述のテキスト・マイニングから―　日本ヒューマン・ケア心理学会学術集会第23回大会 大会プログラム・抄録集，28.

福井 義一・中谷 智美・今井田 貴裕・磯和 壮太朗・堀 孝司・大浦 真一（2022c）．日本における催眠についてのイメージの再検討 その２―催眠状態期待についての自由記述のテキスト・マイニングから―　第11回日本情動学会第１回看護ケアサイエンス学会合同集会抄録集，P-08.

福井 義一・中谷 智美・大浦 真一（2020a）．対人援助の専門職における催眠に対する意識的・非意識的態度　日本心理学会第84回大会発表論文集，53.

福井 義一・中谷 智美・大浦 真一（2020b）．催眠研修参加による意識的・非意識的催眠

態度の変化　日本催眠医学心理学会第66回オンライン大会プログラム・抄録集，19-20.

福井 義一・小原 宏基（2013）．催眠期待と解離傾向が催眠への肯定的態度に及ぼす影響—青年期アナログ群における調整モデルの検討—　日本催眠医学心理学会第59回大会発表論文集，24.

福井 義一・大浦 真一（2016）．催眠に対する意識的（顕在的）態度と非意識的（潜在的）態度の間の乖離—催眠シングル・ターゲット潜在連合テストの開発とその信頼性・妥当性の検討—　臨床催眠学，*17*，16-29.

Fukui, Y., Oura, S., Imaida, T., & Nakatani, T.（2018）. Relationship between conscious and nonconscious attitude toward hypnosis and hypnotizability: Using single target implicit association test. *The 21st World Congress of Medical & Clinical Hypnosis Abstract Book*, 67-68.

Gregoire, C., Faymonville, M. E., Vanhaudenhuyse, A., Jerusalem, G., Willems, S., & Bragard, I.（2022）. Randomized, Controlled Trial of an Intervention Combining Self-Care and Self-Hypnosis on Fatigue, Sleep, and Emotional Distress in Posttreatment Cancer Patients: 1-Year Follow-Up. *International Journal of Clinical and Experimental Hypnosis, 70*, 136-155.

Green, J. P., & Lynn, S. J.（2010）. Hypnotic responsiveness: Expectancy, attitudes, fantasy proneness, absorption, and gender. *International Journal of Clinical and Experimental Hypnosis, 59*, 103-121.

今井田 貴裕・大浦 真一・中谷 智美・福井 義一（2019）．催眠に対する期待や態度と超常現象に対する信奉の関連—催眠と超常現象を同一視することによる有害現象の予防を目指して—　日本臨床催眠学会第20回大会発表論文集，15.

今井田 貴裕・大浦 真一・中谷 智美・福井 義一（2020）．催眠状態期待が催眠態度に及ぼす影響における超常現象信奉の調整効果　日本催眠医学心理学会第66回オンライン大会，17-18.

Keuroghlian, A. S., Butler, L. D., Neri, E., & Spiegel, D.（2009）. Hypnotizability, Posttraumatic Stress, and Depressive Symptoms in Metastatic Breast Cancer. *International Journal of Clinical and Experimental Hypnosis, 58*, 39-52.

McConkey, K. M.（1986）. Opinions about hypnosis and self-hypnosis before and after hypnotic testing. *International Journal of Clinical and Experimental Hypnosis, 34*, 311-319.

McConkey, K. M., Sheehan, P. W., & White, K.（1979）. Comparison of the creative imagination scale and the Harvard Group Scale of Hypnotic Susceptibility, Form A. *The International Journal of Clinical and Experimental Hypnosis, 27*, 265-277.

Melei, J. P., & Hilgard, E. R.（1964）. Attitudes toward hypnosis, self-predictions, and hypnotic susceptibility. *International Journal of Clinical and Experimental Hypnosis, 12*, 99-108.

Milling, L. S., Valentine, K. E., LoStimolo, L. M., Nett, A. M., & McCarley, H. S. (2021). Hypnosis and the Alleviation of Clinical Pain: A Comprehensive Meta-Analysis. *International Journal of Clinical and Experimental Hypnosis, 69*, 297-322.

Montgomery, G. H., Schnur, J. B., & David, D. (2011). The impact of hypnotic suggestibility in clinical care settings. *International Journal of Clinical and Experimental Hypnnosis, 59*, 294-309.

Moreno Hernandez, D., Tellez, A., Sanchez-Jauregui, T., Garcia, C. H., Garcia-Solis, M., & Valdez, A. (2022). Clinical Hypnosis For Pain Reduction In Breast Cancer Mastectomy: A Randomized Clinical Trial. *International Journal of Clinical and Experimental Hypnosis, 70*, 4-15.

中谷 智美・福井 義一（2023）．催眠に対する態度を測定する尺度の信頼性―内的整合性と再検査信頼性の検討―　日本ヒューマン・ケア心理学会学術集会第24回大会抄録集，P-07.

中谷 智美・福井 義一・今井田 貴裕・磯和 壮太朗・堀 孝司・大浦 真一（2022a）．わが国における催眠についての信念やイメージの探索的研究 その１―催眠の使用場面や目的についてのテキストマイニング分析から―　第65回日本心身医学会近畿地方会プログラム集，９．

中谷 智美・福井 義一・今井田 貴裕・磯和 壮太朗・堀 孝司・大浦 真一（2022b）．わが国における催眠についての信念やイメージの探索的研究 その３―利用可能性のテキストマイニング分析―　第63回日本心身医学会総会ならびに学術講演会プログラム・抄録集，195.

中谷 智美・福井 義一・今井田 貴裕・磯和 壮太朗・堀 孝司・大浦 真一（2022c）．催眠についてのイメージと催眠態度の対応関係の性差 その１―催眠の使用場面や目的についての自由記述のテキスト・マイニングから―　日本ヒューマン・ケア心理学会 学術集会第23回大会 大会プログラム・抄録集，27.

中谷 智美・福井 義一・今井田 貴裕・磯和 壮太朗・堀 孝司・大浦 真一（2022d）．わが国における催眠についての信念やイメージの探索的研究 その４―自身が催眠者である場合の使用目的や利用可能性のテキスト・マイニング―　日本心理学会第86回大会抄録集，3EV-015-PD.

中谷 智美・福井 義一・今井田 貴裕・磯和 壮太朗・堀 孝司・大浦 真一（2022e）．催眠についてのイメージと催眠態度の対応関係の性差 その３― 一般的な催眠の利用可能性のテキスト・マイニングから―　日本応用心理学会第88回大会抄録・論文集原稿，2B08.

中谷 智美・福井 義一・今井田 貴裕・磯和 壮太朗・堀 孝司・大浦 真一（2022f）．日本における催眠についてのイメージの再検討 その３― 一般的な催眠の利用可能性についての自由記述のテキスト・マイニングから―　第11回日本情動学会第１回看護

ケアサイエンス学会合同集会 抄録集，P-09.

中谷 智美・福井 義一・今井田 貴裕・磯和 壮太朗・堀 孝司・大浦 真一（2022g）．催眠についてのイメージと催眠態度の対応関係の性差 その4―自身が催眠者である場合の使用目的や利用可能性のテキスト・マイニング― 第26回日本統合医療学会学術大会 プログラム・抄録集，192.

中谷 智美・福井 義一・今井田 貴裕・磯和 壮太朗・堀 孝司・大浦 真一（2023）．日本における催眠についてのイメージの再検討 その4―自身が催眠者である場合の使用目的や利用可能性のテキスト・マイニング― 第66回日本心身医学会近畿地方会第53回近畿地区講習会，36.

中谷 智美・福井 義一・大浦 真一・今井田 貴裕（2021a）．催眠状態期待が主観的・客観的催眠感受性に及ぼす影響の性差 第62回心身医学会総会ならびに学術講演会プログラム・抄録集，181.

中谷 智美・福井 義一・大浦 真一・今井田 貴裕（2021b）．催眠状態期待が催眠感受性に及ぼす影響における催眠態度の媒介効果 第64回日本心身医学会近畿地方会第51回近畿地区講習会プログラム・抄録集，32.

中谷 智美・福井 義一・大浦 真一・今井田 貴裕（2021c）．意識的・非意識的催眠態度が主観的・客観的催眠感受性に及ぼす影響 日本心理学会第85回大会発表論文集，80.

中谷 智美・福井 義一・大浦 真一・今井田 貴裕（2021d）．催眠に対する態度が催眠感受性に及ぼす影響における Locus of Control の調整効果 日本パーソナリティ心理学会第30回大会発表論文集，39.

中谷 智美・福井 義一・大浦 真一・今井田 貴裕（2021e）．催眠状態期待の修正を意図した心理教育による意識的・非意識的催眠態度の変化―大学生を対象とした予備的研究― 甲南大學紀要 文学編，172，151-71.

Nakatani, T., Fukui, Y., Imaida, T., Isowa, S., Hori, T., & Oura, S.（2022）. Re-examining images of hypnosis in Japan Part 1: Text mining of responses to open-ended questions on typical uses and/or purposes of hypnosis. 台灣心理學年會手冊，347.

Nakatani, T., Fukui, Y. Oura, S., & Imaida, T.（2021a）. Gender differences in the effects of expectancies for hypnotic state on attitude towards hypnosis. The 11th Asian Conference on Psychology & the behavioral Science Program + Abstract Book, 43.

Nakatani, T., Fukui, Y. Oura, S., & Imaida, T.（2021b）. Cluster analysis of expectancies for the hypnotic state and attitude towards hypnosis: Reproducibility in different sample. 台灣心理學年，CLI-15.

Nakatani, T., Fukui, Y. Oura, S., & Imaida, T.（2022）. Changes in expectancies for the hypnotic state directly associated with improvements in conscious/nonconscious attitudes towards hypnosis: An intervention study with Japanese university students. Proccedings of the 19 Congress of Asian College of Psychosomatic Medicine, 38.

Nakatani, T., Fukui, Y., Oura, S., & Imaida, T. (2023). Changes in expectancies for the hypnotic state directly associated with improvements in conscious/nonconscious attitudes towards hypnosis Part 2: Pre-psycho-education scores based on the theoretical median as the independent variable.

中谷 智美・大浦 真一・今井田 貴裕・福井 義一（2019a）．催眠に対する態度が催眠感受性に及ぼす影響における没入傾向の調整効果　日本パーソナリティ心理学会第28回大会発表論文集，130.

中谷 智美・大浦 真一・今井田 貴裕・福井 義一（2019b）．催眠に対する態度が催眠感受性に及ぼす影響における日常的解離傾向の調整効果　日本心理学会第83回大会発表論文集，383.

中谷 智美・大浦 真一・今井田 貴裕・福井 義一（2019c）．催眠に対する態度が催眠感受性に及ぼす影響における病的解離傾向の調整効果．関西心理学会第131回大会発表論文集，55.

中谷 智美・大浦 真一・今井田 貴裕・福井 義一（2019d）．催眠に対する態度が催眠感受性に及ぼす影響における空想傾向の調整効果．日本臨床催眠学会第20回大会発表論文集，13.

大浦 真一・松尾 和弥・福井 義一（2018）．紙筆版催眠シングル・ターゲット潜在連合テストの開発―催眠への意識的・非意識的態度と催眠に対するイメージの関連― 臨床催眠学，*19*，40-50.

Rotaru, T. S., & Rusu, A. (2016). A Meta-Analysis for the Efficacy of Hypnotherapy in Alleviating PTSD Symptoms. *International Journal of Clinical and Experimental Hypnosis, 64*, 116-136.

Schaefert, R., Klose, P., Moser, G., & Häuser, W. (2014). Efficacy, tolerability, and safety of hypnosis in adult irritable bowel syndrome: systematic review and meta-analysis. *Psychosomatic medicine, 76*, 389-398.

Shimizu, T. (2014). A causal model explaining the relationships governing beliefs, attitudes, and hypnotic responsiveness. *International Journal of Clinical and Experimental Hypnosis, 62*, 231-250.

清水 裕士（2016）．フリーの統計分析ソフト HAD: 機能の紹介と統計学習・教育，研究実践における利用方法の提案　メディア・情報・コミュニケーション研究，*1*，59-73.

清水 貴裕（2009）．催眠状態期待と催眠態度が催眠感受性におよぼす影響　秋田大学教育文化学部研究紀要　人文科学・社会科学部門，*64*，27-31.

清水 貴裕（2019）．自己受容が催眠状態信念の形成に及ぼす影響　東北学院大学教養学部論集，(184)，1-8.

清水 貴裕（2022）．催眠反応性の規定因に関する臨床社会心理学的研究　風間書房

清水 貴裕・小玉 正博（2001）．催眠状態イメージと催眠態度との関連　筑波大学心理学研究，*23*，219-227.

Shor, R. E., & Orne, E. C.（1962）. Harvard group scale of hypnotic susceptibility, form A. *International Journal of Clinical and Experimental Hypnosis*.

Spanos, N. P., Brett, P. J., Menary, E. P., & Cross, W. P.（1987）. A measure of attitudes toward hypnosis: relationships with absorption and hypnotic susceptibility. *American Journal of Clinical Hypnosis, 30*, 139-150.

高石 昇・中村 千珠（2006）．The Creative Imagination Scale 日本語版：「イマジネーション尺度」―作成および臨床適用について―　臨床催眠学研究，*7*，59-68.

Weitzenhoffer, A. M., & Hilgard, E. R.（1962）. *Stanford hypnotic susceptibility scale, form C*: Palo Alto, CA: Consulting Psychologists Press.

Wilson, S. C., & Barber, T. X.（1978）. The creative imagination scale as a measure of hypnotic responsiveness: applications to experimental and clinical hypnosis. *American Journal of Clinical Hypnosis, 20*, 235-249.

（なかたに　ともみ／臨床心理学）
（ふくい　よしかず／臨床心理学）

Reliability of scales measuring attitude towards hypnosis: test-retest reliability and internal consistency.

Tomomi Nakatani[1] & Yoshikazu Fukui[2]
[1]Graduate School of Humanities, Konan University & [2]Konan University

Abstract

Hypnosis is known as an effective technique to care for the mind and body. An evaluative attitude towards hypnosis is considered to be an important concept when examining the effects of hypnosis. This is because individuals' attitude towards hypnosis is consistently positively related to hypnotizability, which is one of the factors that strongly predicts the effects of hypnosis. However, in Japan, the only scale that measure the attitude towards hypnosis is the Scale for Attitudes Toward Hypnosis (6-item version: Shimizu & Kodama, 2001; 12-item version: Shimizu, 2009; 5-item version: Shimizu, 2014, 2022). Although the number of items in these scales has differed with each revision (6-item version: Shimizu & Kodama, 2001; 12-item version: Shimizu, 2009; 5-item version: Shimizu, 2014, 2022), the internal consistency of the scales is generally high. However, test-retest reliability has not been examined in any of the versions. In the present study, we examined the test-retest reliability and reexamired the internal consistency of each version of this scale. Sixty-nine adults participated in two online surveys approximately one week apart. The analysis showed that all versions had high test-retest reliability (rs > .81, ps < .001) and internal consistency (αs > .81), but the 5-item version (Shimizu, 2014, 2022) has the highest reliable, due to its confirmed one-factor nature and the lowest variability the two between measures.

Keywords: attitude towards hypnosis, test-retest reliability, internal consistency, hypnotizability